見えない流れを旅する
ファム・ゴック・ラン監督『The Unseen River』をより楽しむためのガイド

秋葉 亜子

The Unseen River（ベトナム語タイトル：Giòng Sông Không Nhìn Thấy）あらすじ

水力発電所を訪れて30年前に一夜をともにしたかつての恋人に再会する女性と、不眠治療のため寺院に僧侶を訪ねる青年の姿を描く。

0

『The Unseen River』は、メコン川流域５カ国の監督が参加した短編オムニバス映画『MEKONG 2030』のうちベトナムのファム・ゴック・ラン監督による作品である。

1986年生まれのラン監督が映画に関わり始めたのは遅く、ハノイ建築大学[1]卒業後にドキュメンタリー映画制作コース[2]や若手映画人のためのワークショップ[3]、あるいは海外の映画教育プログラム[4]等で研鑽を積んだ。監督のみならず、脚本、撮影そしてカラリストまで手がける。数々の国際映画祭の企画コンペで注目され、ベトナム・インディペンデント映画の注目株として名が挙がる一方で、本人は国内での興行や認知度にはこだわりがない[5]。「短編映画のポテンシャルを最大化したい。今の映画は語り過ぎだ。余白を多くし、観客に作品の完成を委ねたい」と言い[6]、これまでの作品[7]もダイアローグ、説明ともに非常に少ないのが特徴である。独特な世界観を緻密なデザインで表出することを追求し、そのため初長編作品[8]はすでに着手しているものの、なかなか“完成”に至らない。

2020年の『The Unseen River』はラン監督が初めて受注して制作した映画で、監督曰く「ダイアローグが多い」。発注者の意図[9]を汲みつつも、作品に啓発的な箇所は微塵もなく、むしろ抽象的に過ぎる。「メコン川というと最近はダムが環境に与える悪影響が取り沙汰されるが、私はより抽象的かつ和やかな方向性で」、「シンプルにすることで観る人の多くが善意を感じられるように」、「いかに川の流れが人と切っても切れないものであるかを感じてもらえるように」を目標として制作したと監督はインタビューで答えている[10]。

1）都市デザイン・都市計画を学ぶ（2004年から2008年）。

2）ハノイ・ドックラボ Hanoi DOCLAB〈http://www.hanoidoclab.org/en/〉

3）オータム・ミーティング Autumn Meeting〈https://www.facebook.com/autumnmeeting/?ref=page_internal〉

4）ナショナル・ボード・オブ・レビュー National Board of Review〈https://nationalboardofreview.org/〉

5）今作も配給する予定はないとのこと。ベトナム国内の公開には政府の上映許可が必要だが、申請しない場合は内容に関して意見・要求（いわゆる検閲）されない。

6）2021年２月20日アテネ・フランセ文化センター「ベトナム映画の現在」シンポジウムにて〈http://www.athenee.net/culturalcenter/program/vi/vietnamesecinema.html〉

7）『The Story of Ones』（2011年）〈https://vimeo.com/30610596〉（ダイアローグは一切ない）、『Another City（アナザー・シティ）』（2016年）〈https://vimeo.com/147896582〉、『Blessed Land（聖地）』（2019年）〈https://vimeo.com/309296833〉

8）『Cu Li Never Cries』〈http://phamngoclan.com/culinevercries/〉

9）ルアンパバーン映画祭の発注者側の意図は、「映画を見た観客が深刻なダメージを受けている環境に目を向け、自然環境を保護する活動に積極的に参加するよう観客の動機付けを行う」ことであるとされる［橋本 2021: 8］。

10）Global Times interview より（監督提供）。同じ文脈で「すでに映画は情宣としての機能を脱ぎ捨てて長い」とも述べている。

1. 仏教とダム、上流と下流、過去と未来

作品を通して扱われる仏教とダムという2つの要素がメコン川と深く関わるものであることには（大乗仏教と上座部仏教の区別はあれど）異論はないだろう。

この作品では川の流れ、時間の流れ、そして眠りという3つの流れの暗喩的な関連性が検証される。

1-1

2つのストーリーラインはそれぞれ上流と下流で展開される。登場人物の上流／下流への旅は時間の旅でもある。一般的に年配者は過去を振り返り、若者は未来に思いを馳せる。この作品でも前者は過去を遡り、後者は未来を希求する。

上流と下流とのシーンが断続的に入れ替わって境界線が曖昧なのは、ラン監督の常套であるが、監督が脚本を書くにあたってインスピレーションを受けたというヘルマン・ヘッセ『シッダールタ』の「川はいたるところで同時に存在する」にも通じているように感じる。

●1－1－1

上流の舞台はスレポック川。メコン川の国際支流であり、ベトナム国内だけでも複数のダムが建設されている[11]。

年配の女性[12]（脚本ではグエン、60歳）がかつて勤めていた水力発電所を訪れる。上流へと遡るこの旅は、これまでの彼女の人生――ダムによって堰き止められ、方向をねじ曲げられた川のような――を形作った過去の出来事を遡る旅とも取れる。

なお、彼女の名前は漢字で表すなら【願】と書く。この作品に登場人物は少ないが、その中でも名前を持つキャラクターは3人だけである。

生命感のない老朽化したダムを背に、グエンは川を見下ろす。不思議と印象的な犬を目で追うと、その先に魚を釣る男性がおり、グエンの視線に気付いてしばらく両者は見つめ合う。会話の内容から2人は30年前に不倫関係を持ち、しかし男性は黙って留学してしまったことが分かる。グエンは夫に後ろめたさを感じ、離婚している。一方、男性（フィエン【煩】、55歳）は「自分にとって切っても切れないものは何だったのかに気づくのに何年もかかってしまった」と言い、彼の体に残る「川によってつけられ、心にまで達している」傷跡を示す。「そうね、時間にしか解決できないことがあるし、もし時が経っても忘れられないのだとしたら、それが自分にとっていかに大切なものだったか分からせてくれるのも時間だわ（＝時の流れは癒し）」とグエンは言い、フィエンに「修行僧のような物言いだ」と返され謙遜する。

「あなたとのことを夢か現か分からなくなるほど何度も夢で見た」と言うグエンの告白を聞いてか聞かずかフィエンは自分と犬とでは食べ切れないほど大量の魚を捌き、赤い血が川の水に薄まってゆく（＝川の流れは癒し）。フィエンの体の傷は彼自身によって捌かれる魚であり、つまり、いつまでも癒えることがなく、フィエンは自分を傷つけ続け、煩悩を抱えたまま生きているように見える。

傍には犬がおとなしく座っている。30年前にグエンから別れの記念に贈られた犬の仔だというこの犬は、今回グエンをフィエンの元へと導く役割を果たしたが、その無垢な存在感は『シッダールタ』のゴータマ（仏陀）に重なる。フィエンはというと、ゴータマの傍らで過ごしながらも煩悩を拭えないシッダールタの幼なじみを彷彿とさせ、「あなたといる時だけ自分の弱さを感じられるし、意外にも弱さを快く受け入れることができる」と言うグエンは川のほとりで自力で悟りを開いたシッダールタのようである。

2人が別々に川を見つめる上流のラストシーン近くでは、グエンの目が涙で真っ赤になっている。再び犬の姿を追うと、フィエンがこちらを見ているシーンが繰り返される。一方には見えず、もう一方には何かが見えているのかもしれない。

ここで流れるメロディは、クレジット曲[13]をアレンジし伝統楽器[14]でしっとりと演奏されており、下

11）ベトナム中部高原に源を発し、カンボジア北東部のモンドルキリ州、ラタナキリ州、ストゥントレン州を流れる川。流域総面積は、約3万平方キロ。うち1万8,200平方キロはベトナム領内を通る。ベトナム国境から245キロの地点でセサン川と合流し、メコン川の本流に流れ込む。カンボジア領内の川沿いには、21か村に約1万1,000人が暮らす〈http://www.mekongwatch.org/report/tb/srepok_table.html〉（実際の撮影は北部のホアビンダムで行われた）。

12）演じるのはベテラン女優のミン・チャウ。ラン監督の作品の常連で、どの作品にも同じ衣装（海老茶色のミニ丈ワンピース）で登場する。

13）『RETROGRADE』。下流の若いカップルを演じる2人（NAOMI ft. WEAN）による楽曲〈https://www.youtube.com/watch?v=nH575Ld1ATg〉。

14）シタールとハンマー・ダルシマー。

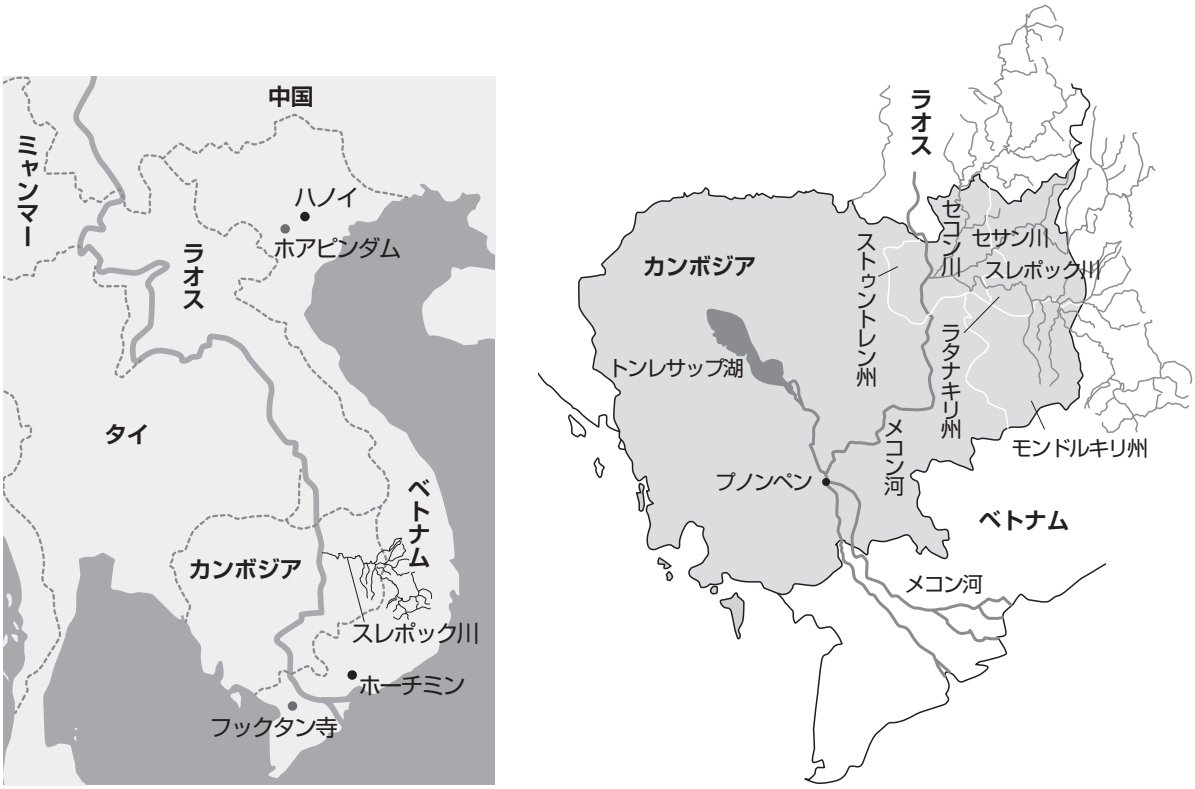

図1　作品の舞台

Google Map、メコンウォッチ〈http://www.mekongwatch.org/report/tb/3sDam.html〉より筆者作成

流のラストでも流れ、オリジナルのクレジット曲へと受け継がれる。

●1-1-2

下流の舞台はアンザン省のフックタン寺[15]である。不眠症に悩む若者が恋人とともに寺院を訪れる。これは現在の病を克服した先、すなわち未来への旅と言える。刺青にピアスという出で立ちながら寺を訪れ合掌する控えめな態度はどこかちぐはぐで、理屈では説明できない行動である[16]。

老僧（65歳）は「深く眠ることは川の流れに身を浸すのと同じ。睡眠／沐浴後は魂が赤子のように無垢になる。川の流れも眠りもどちらも赦しなのだ」、「不眠の最大の弊害は夢を見ないこと。夢は人が過去に戻れたり、未来を見つめられる唯一の方法」と語る。したがって今この若いカップルにとって未来はぼんやりとあやふやで、捕まえることができないのだと。

青年はトゥック（【実】、22歳）といい、周囲から恋人（24歳）との結婚をせっつかれることに困惑し「愛してないわけじゃないが、未来がないから」と若い僧侶に打ち明ける。

殺生しないはずの寺院に釣り道具があるのを訝るトゥックに、若い僧侶は、老僧が中国で姜子牙[17]の教えを学んだこと、釣り糸には針も餌もついておらず、魚を釣るためではなく、心を鎮めるためだと話す。僧侶が釣竿を振るとLEDライトの付いた浮きが中空で揺れる。恋人は思わず「キレイね。ホタルみたい」と声を上げるが、この寺では老僧は早く床に入り、若い僧侶も夜の外出を躊躇するため、使ったことがないらしい。

トゥックに老僧に師事する理由を尋ねられた若い僧侶は、仏の教えに従っていれば安心できるし、自分には帰る場所はない、妻子は10年前の大雨で死んだと答える。また、夢の中に妻子が出てきても[18]、なぜ成仏できずにいるのか答えを聞くのが怖くて聞けず、言葉を交わさないと言う。妻子の魂に怯え、釣り糸を寺のテラスから中空に垂らして光る浮きを眺めるだけの若い僧侶は、ひたすら迷い続けることを自らの生に課しているようにも見える。彼もまた、仏の膝下

15）メコン川本流の下流にあるAn Giang省、Phuoc Thanh寺〈https://canthomekongtour.com/vi/blog/phuoc-thanh-pagoda-spiritual-place-in-an-giang-52〉。なお、メコン川のことをベトナムではクーロン【九龍】川とも言う。

16）タイのアノーチャ・スウィチャーゴーンポン監督の『The ~~Line~~』の中の「占い師にみてもらいにいく？」というシーンを連想させる。

17）呂尚。古代中国・周の軍師。渭水（いすい）で釣りをしていて周の文王に見いだされ、先君太公の望んでいた賢人だとして太公望と呼ばれたと言われる。

18）夢は死人との邂逅の手段にもなるということか。

にいながら悟りを開けないキャラクターである。

その夜トゥックはたった一人で闇の中を釣竿を手に川岸に向かい、光る浮きを川に浮かべる。ホタルのような光が水中で揺れる。伝統楽器の静かなメロディが始まり、カメラが対岸に向けて水面を進むと、チラチラと光が増えていく[19]。川の流れを見つめ、川の音を聞きながら、トゥックは目を真っ赤にして泣く。ヘッセの『シッダールタ』には、「生きとし生けるものすべての声が川の中にある」とあり、また、主人公シッダールタは川のほとりで悟りを開くと涙を流し、ぐっすりと眠った。同じようにトゥックも悟りを開き、あるいは、結婚を迷う彼は浮きを川に浮かべたことで自身がもはや中空に漂っていられる存在ではないと観念し、泣いたのかもしれない。

2. 脚本との相違点

ラン監督は時間的に、そして予算的にも潤沢ではない撮影であったことに忸怩たる思いがあるらしく、いくつかの場面でそう吐露している[20]。以下に脚本や監督本人とのやりとりから知り得た例を挙げる。

●2-1-1

映画の冒頭で若いカップルがバイクにまたがってフェリーに乗っているシーンは、 脚本の段階では終末論的な歌詞[21]の楽曲が流れ、同じ曲がラストシーンでも使われる予定だった。実際は若いカップルを演じた2人が歌い、本作と雰囲気もぴったりな『RETROGRADE』が採用されている。

●2-1-2

照明について、監督は今までの作品全てに関して満足していないが今作も例外ではない。予算不足で照明は使えず、その場所とその時刻の自然光で撮影した。特にラストシーンはメコン川いっぱいにホタルの光が広がっていく様をイメージしていたが[22]、CGを諦めざるを得なかった。

●2-1-3

上流のストーリーラインにおけるフィエンの留学先は脚本では中国と明示されているが、グエンは「外国に留学」と言っている。下流の寺でも中国の姜子牙の名が出ており、この重複する言及は、メコン川がチベット高原に端を発し中国雲南を経たのち今回のオムニバス作品を監督した5人の国を流れる川であり、中国も決して部外者ではないとリマインドするためではないだろうか。

●2-1-4

若い僧侶のセリフ「妻子は10年前の大雨で死んだ」は、英語の脚本では「そうだ。10年前に大雨が降った。ダムが決壊した。水力発電所が夜中に事前通達なしに放水した。私の妻子だけでなく、村（人全員）が行方不明になった」とかなり長いが、ベトナム語の脚本では「10年前の大水で水に流されて死んだ」と書かれており、最終的に非常に簡潔な内容になっている。

3. おわりに

ラン監督のこれまでの作品には「時を超越した対峙」、「他の場所にいるはずの登場人物が一堂に会する」といった「時空の同一性」が現れる。ベトナム語の đây「今、ここ」は時間と空間の両方を含めた意味を持つが、今回メコン川というテーマを与えられた監督は脚本冒頭のディレクターズ・ステイトメントの中で、「まさに今この時を過ごしている登場人物たちが、どうやって時を超え旅をするのか？という一見矛盾して見える興味深い問いに、映画は挑めると思う」と述べている。映画という手法で時空を超える。自分のスタイルと与えられたテーマの接点を極める一作となった。

19）ホタル、あるいは鬼火（人魂）。

20）42nd Clermont-Ferrand International Short Film Festival（クレルモンフェラン国際短編映画祭）Q＆A（監督提供）など。

21）ダムの影響により人々が命を落とす隠喩的な内容と解釈できそうである。

22）脚本執筆時にインスパイアされた作品『シッダールタ』と並びヴィエト・タン・ウェンとカレル・チャペックの名が挙げられた。ベトナム系アメリカ人ヴィエト・タン・ウェンの出世作『シンパサイザー』に、ラオスから闇夜に紛れてメコン川を渡る時に無数のホタルが光る場面描写がある。

参考文献・参考ウェブサイト

ヘルマン・ヘッセ、高橋健二［訳］1971『シッダールタ』新潮文庫。

ヴィエト・タン・ウェン、上岡伸雄［訳］2017『シンパサイザー』早川書房。